

「歴史の終わり」から小説の創作へ

—レイモン・クノー—

『人生の日曜日』をめぐる—

中 里 まき子

序

レイモン・クノーは、大学で哲学を学んだことから伺えるように、哲学に強い関心を示し、深い知識を持っていた。しかし、生涯にわたっていわゆる哲学的著作を残すことはなかった。クノーは、哲学的思想に向き合うための手段として小説を選んでいたように思われる。彼が小説作品に何らかの思想を取り入れるとしても、それは伝達するためではなく、文学的創造の素材とするためである。

本論では、コジエーヴが伝えた「歴史の終わり」との関わりにおいて、クノーの小説『人生の日曜日』の読解を行うが、その試みの根本には、文学の創作というミステリアスな知的活動を部分的にでも解明したい、という思いがある。よって本論では、『人生の日曜日』が創作される過程で、「歴史の終わり」の思想がどのような役割を果たしたか、さらには、小

説が読まれる過程、つまり小説の受容に対して、この思想がどんな影響を与えたか、という点を検討する。

—ヘーゲルⅡコジエーヴの小説—

まず、クノーがヘーゲル哲学を受容した状況と、小説『人生の日曜日』の執筆に至るまでの経緯を要約したい。クノーは一九二〇年代にソルボンヌ大学で哲学を学んだが、クノー自身が述べているように、その頃ヘーゲルはフランスではまだあまり知られていなかった⁽¹⁾。ヘーゲルが本格的に知られるようになるのは、一九三〇年代に、亡命ロシア人のアレクサンドル・コジエーヴがパリ高等研究所で講義を行ったときである。その講義を、クノー以外にも、バタイユやラカン、ブルトン、ヴェイユ、メルロ・ポンティ、クロソフスキーなどが受講し、それはフランス思想界に大きな影響を与えることになる。この講義の中でコジエーヴはヘーゲルの『精神現象学』を解釈し、解説を加えた。ジャン・イポリットが『精神現象学』のフランス語訳を出版するのは一九三九年から四年であるから、コジエーヴの講義はそれに先んじていたことになる。

コジエーヴがヘーゲル歴史哲学の新しい解釈をフランスに伝え、広めるにあたって、クノーは大変重要な役割を演じた。

クノーはコジエーヴの講義に熱心に出席した後、一九四七年に講義録を『ヘーゲル読解入門』としてコジエーヴに代わって編纂・出版した。そして五年後の一九五二年に、タイトルとエビグラフをヘーゲルの言葉から採った『人生の日曜日』を出版した。

この小説の物語は、一九三〇年代半ばのボルドーで幕を開ける。ヴァランタン・ブリュという名の主人公はマダガスカルでの植民地戦争から戻り、兵役を終えるところである。あるとき、雑貨屋を営む中年女性ジュリアがヴァランタンに一目惚れし、この若者と結婚する。一九三六年、遺産を相続した二人はパリに移り住み、ヴァランタンはそこで額縁を販売する店を経営する。一方ジュリアは、夫に内緒で、サフィール婦人という名前で占い師として働き始める。ジュリアが病に倒れると、ヴァランタンが代わりに占い師サフィール婦人の役割を演じるようになる。その頃、第二次世界大戦が勃発し、ヴァランタンは軍隊へ戻る。ドイツ軍がフランスに侵攻し、ヴァランタンが除隊になるところで小説は終わる。

このように、小説の物語内容はとくに哲学的ではなく、哲学談義を繰り広げる知識人も登場しない。しかし、次に検討するいくつかの理由で、『人生の日曜日』がヘーゲル哲学をはじめとする思想を伝えていると考えることができる。

まず、前述のとおり小説のタイトルとエビグラフはヘーゲ

ルの言葉から採られている。

「……人生の日曜日こそがすべてを平等にし、すべての邪悪なものを退ける。これほど上機嫌になれる人々が、根っからの悪人であったり、卑劣な人種であったりするはずはない。——ヘーゲル⁽²⁾」

このエビグラフは『美学講義』からの引用である。

また、『人生の日曜日』のテキストにおいて、ヘーゲルや『精神現象学』への直接的、あるいは間接的な言及がなされる。主人公ヴァランタン・ブリュは歴史に造詣が深く、とりわけナポレオン戦争のイエナ戦役に興味を示す。

「それはおもしろい戦いですね、マルヌは」ヴァランタンは夢見るように言う。「知ってます。でもぼくはとくにイエナに興味があります。イエナの戦いに。」⁽³⁾

あるときヴァランタンは、ドイツのナポレオン戦争の戦地を巡るバスツアーに参加し、イエナを訪れるという長年の夢を叶える。このドイツ旅行を家族に報告しながら、彼はヘーゲルの『精神現象学』に暗示的に言及する。

イエナでは、ドイツのある哲学者の家を見せてもらった。戦闘のあった当日、彼「『ナポレオン』」のことを「世界の魂」って呼んだ哲学者さ。⁽⁴⁾

「ドイツのある哲学者」はヘーゲルのことで、この引用箇所はヘーゲルが一八〇六年のイエナ戦役のときに『精神現象学』を執筆したことを喚起している。

ところで、もしヴァランタン・ブリュをヘーゲルの「賢者」に比較することができるとすれば、それはこの主人公が、過去の戦争以上に未来の戦争について考え、語り続けるからである。一九三六年に新婚旅行のためパリの東駅を訪れたヴァランタンは、第一次世界大戦へ出征する兵士たちを描いた大壁画を鑑賞し、独白する。——「もうすぐ、また別のが必要になるだろう、別の作品が。次の戦争のために。なしで済ますわけにはいかないだろう。次の戦争を。」⁽⁵⁾ヴァランタンは来るべき戦争に敏感になるあまり、パリの新聞売りの掛け声を聞いて宣戦布告がなされたと思ひ込んでしまう。

戦争を予感し続けるこの主人公の人物像は、ヘーゲルの「賢者」をモデルとしている可能性がある。クノーがコジェーヴを通して学んだヘーゲルの歴史哲学は、「歴史の終わり」や「絶対知」という概念に特徴づけられる。

「……」絶対知、すなわち知恵は、人間による否定の行動の全面的な成功を前提とする。この知は以下の状況においてのみもたらされる。一、いかなる人間も他の人間にとって外部の者ではなく、また、解決されない社会的対立がもはやひとつもないような普遍的で均質な国家において。二、人間の労働によって手なずけられた自然のただ中において。その自然は、人間に対立するものでも、人間の外部にあるものでもない。もし絶対知において、賢者が正当な権利として「それ自体としての存在」と「彼がそうであるところの存在」の同一性を保証できるとすれば、それは、賢者が、国家の内部における衝突が完全に解決されたこと、また、国家と（社会的あるいは自然の）世界との間に明白な対立がもはやないことを経験しているからである。⁽⁶⁾

人間が労働によって自然を内側に取り込み、すべての矛盾や葛藤を解決すると歴史が完成される。その後には、もう何も新しいことは起こらず、既に起こったことを繰り返すことしかできない。「賢者」はこの「歴史の終わり」の視座から現実を振り返る存在である。ヘーゲルはナポレオン戦争のイエナの戦いによって、人類がこの「歴史の終わり」に達すると考えた。「人生の日曜日」の主人公ヴァランタン・ブリュは、

歴史が完了した後に登場するという「賢者」の化身であると考えることができる。彼は第二次世界大戦の到来を予感し、この戦争をナポレオン戦争の繰り返しと捉えている。

ヴァランタンが歴史の流れに反復的な運動を見ていることは、第十六章のレストランの場面で示される。ジュリアとその妹夫妻との食事中、彼は突然、兵役を務めたマダガスカル⁽¹⁾の思ひ出を語り始める。

「マダガスカルでは」ヴァランタンは出し抜けに言った

「死体を埋め直すんだよ」

「何だって」三人は言った。

「死体を埋めて」ヴァランタンは続ける「それから、しばらく時間が経つと、埋めたところから掘り出して、ほかの場所に埋めに行くんだ」

「なんて野蛮なんだろう」ジュリアは言う。

「歴史だって同じさ」ヴァランタンは言う「勝利も敗北も、もうこれですっかりおしまいついていう終わりはないんだ。勝利とか敗北とかを、しばらくしたら掘り起こして、ほかのところで腐らせるんだから」⁽²⁾

マダガスカルで目撃した死体の埋め直しの儀式に、ヴァランタンは歴史の反復的な動きを重ね合わせ、戦争における勝利

や敗北の概念、さらには歴史の概念そのものを問い直す。

ヴァランタンは知識人ではなく、意識的に哲学的な議論をすることはない。しかしクノーはこの主人公の言動に、「歴史の終わり」という思想を潜ませているように思われる。小説中で、ヴァランタンの思考の内容が明かされることはほとんどないが、彼は例外的に「歴史」と「時間」についてだけ独自の考えを持つようになる。歴史に反復的な運動を見出す彼は、さらに、時間の経過というものを否定する見方を提示する。

過ぎゆく時間、それは美しくも醜くもない。いつだって同じようなものさ。ときどきは雨が数秒間降るかもしれない。もしくは四時の太陽が棒立ちになった馬のように数分間とどまるかもしれない。過去は、柱時計が現在に与えているようなきれいな配列を常に保っているわけではないかもしれない。未来はめっちゃくちゃに走つてきて、それぞれの瞬間はわれ先にひと切れずつ小売りされるべく、押し合いへし合いするかもしれない。「……」ヴァランタンは、さまざまな長さの固まりに分割されていても性質は常に同じであるような、ある同一性で満足していたかった。その同一性を秋の色彩に染めたり、三月のにわか雨の中で洗ったり、雪の不規則さで斑点を付け

たりすることを望まなかった。⁽⁸⁾

クノーは、主人公の時間についての考えをこうして詩的な言語で描き出し、この人物が時間に同一性のみを見出そうとすることを示している。

既に述べたように、クノーは三〇年代にアレクサンドル・コジェーヴの講義を通してヘーゲル哲学を学んだ後、四七年に講義録を出版し、さらに五二年に、ヘーゲルの言葉をタイトルとする小説『人生の日曜日』を出版する。この小説には、ヘーゲルや『精神現象学』への言及がいくつもある上に、主人公ヴァランタン・ブリュは、歴史が終わった後の視点から現実を振り返る「賢者」の化身であると考えることができ。

では、クノーが『人生の日曜日』を執筆したのは、ヘーゲル哲学を文学的に書き直して伝えるためなのだろうか。

二 「歴史の終わり」は本物の鍵か？

クノーがこの小説においてヘーゲルの思想に向き合う姿勢はもつと複雑で、波瀾を含んだものである。というのも、ヴァランタンは歴史や時間の探求者として描かれているものの、実のところこの人物には歴史哲学を語る資格がないからである。クノーはヴァランタンの若さを、とくに年上の妻ジ

ュリアとの対比において強調し、この主人公には歴史や時間を把握する能力がないことを示す。歴史を日めくりカレンダーで学んだというヴァランタンに対し、二十歳年上のジュリアは、第一次世界大戦など、歴史的事件のいくつかを実際に経験している。二人の年の差と経験の違いについて、ジュリアの妹シヤンタルは次のように表現する。

あんたはね、赤いズボンをはいたフランス軍歩兵部隊が、ファリエール大統領の前で行進するのを見たことがある人間よ。ヴァランタンはと言えば、ファリエール大統領なんて名前も知らないに違いないわ。⁽⁹⁾

ヴァランタンは歴史に興味を持ち、時間の神秘を探求する。しかしこの小説には、歴史や時間についてヴァランタンよりも遙かによく知っている人物たちが登場する。例えば、新婚旅行の途中、ヴァランタンは勤続三十年のタクシー運転手と出会い、次のような話を聞く。

いいですか、私は三十年来タクシー商売をやってるんです。最初の車はブラジエでね。じっさい、見事な車だったな。『…』私はマルヌの戦争にも参加しましたよ。ジヨッフルとガリエニの指揮下でね。あなたはまだ若い

ら知らないだろう。マルヌのタクシーなんて。¹⁰⁾

ヴァランタンは歴史は繰り返すものと考え、時間の経過を否定する立場を取るが、彼は古いも病氣も知らない二十代の若者にすぎない。それに対しジュリアは、歴史を生き抜いたばかりか、老いに伴う体調の悪化を通して時間の経過を体現する。ヴァランタンが歴史や時間の探求者であるとしても、クノーは、彼の無力さを際立たせるようなもうひとつの視点——ジュリアの視点——を小説に滑り込ませている。

ジュリアは突然に思った。ヴァランタンにとつての永遠は、おそらく、ジュリアにとつての永遠よりもっと長いだろうと。もし、永遠が今この瞬間に始まるとしても。ジュリアはヴァランタンを見た。まだこんなに若い。そして、不安や羨望や哀れみが彼女を捕らえた。そして彼女の心臓は、不幸をたたえたりリズムで、ゆっくりと鼓動し始めた。¹¹⁾

小説『人生の日曜日』がヘーゲル哲学の影響のもとに書かれたとしても、その影響は、完全に素直で一方通行的なものではない。ピエール・マシユレが指摘するように、コジエーヴが伝えた思想は「小説を読み解く鍵のひとつ」¹²⁾ではあつて

も、それによつて作品のすべての謎が解き明かされるわけではない。確かに主人公ヴァランタンは、コジエーヴが定義した「賢者」であるように思えるが、小説中にはそれを否定するような側面も含まれる。ヴァランタンは、年上の妻ジュリアと比べて、歴史や時間の流れを理解していない若者として描かれてもいるからである。

また、「歴史の終わり」の思想は小説『人生の日曜日』を「読み解く鍵のひとつ」というだけでなく、それは、小説の受容を攪乱する要素でもあつた。一九五二年にクノーが『人生の日曜日』を出版すると、コジエーヴは雑誌『クリティック』に論考を発表する。そこでコジエーヴは、クノーの三篇の小説「わが友ピエロ」、「ルイユから遠く」、「人生の日曜日」を「知の小説」と呼び、それらの小説の主人公が「賢者の化身」であると認定する。

これらの三つの小説は「知」の問題を扱っている。クノーはそこに、「賢者」の三つの化身を描いている。それは「賢者」の三つの側面であり、それを構成する異なる相補的な契機である。¹³⁾

ヘーゲル哲学を伝えたコジエーヴ自身が、『人生の日曜日』の主人公ヴァランタン・ブリュを「賢者の化身」とみなした

ことは、作品の受容に大きな影響を与えた。つまり、多少とも哲学的に小説を読もうとする読者は、コジェーヴが伝えた思想を参照するよう強く誘導されたのである。その結果、本来は検討すべきであったのに見過ごされてきた視点があるように思われる。それは、『人生の日曜日』を、シモーヌ・ド・ボーヴォワールの小説『招かれた女』と比較する視点である。

三 「招かれた女」との比較

死後に刊行されたクノーの日記によると、クノーは、『人生の日曜日』を執筆していた一九五一年に、ボーヴォワールの『招かれた女』を読み返している。この小説のエピグラフは、『人生の日曜日』と同様、ヘーゲルの言葉から採られている。

それぞれの意識は他の意識の死を求めている。

——ヘーゲル⁽⁴⁾

このエピグラフが暗示するように、ボーヴォワールの小説は、自己の意識と他者の意識の葛藤をはらんだ関係に焦点を当てている。つまり、複数の意識の相克から死に至る過程が描か

れる。クノーの『人生の日曜日』は、このボーヴォワールの『招かれた女』を念頭に置いて書かれたのではないだろうか。いずれもヘーゲルの言葉をエピグラフとして掲げ、第二次世界大戦前のパリの日常生活を描く、という共通点がある。その一方で、他者の問題に関しては、クノーはボーヴォワールとは対比的な姿勢を打ち出している。

まず、「他者の死を求める」という、ボーヴォワールが描く自己意識を概観したい。『招かれた女』の冒頭では、ボーヴォワールをモデルとするフランソワーズと、サルトルをモデルとするピエールは恋人同士である。作家のフランソワーズと俳優兼舞台監督のピエールは、何でも率直に話し合うことによって二人でひとつの世界を共有していると思いつている。その状態について、メルローポンティは『意味と無意味』において分析している。

その日の出来事や考えたことのひとつひとつは伝達され、共有される。感情はそのつど解釈され、会話の材料となる。二人の世界は、各自に起ることのすべてによって構築される。フランソワーズにとってピエールは、外の世界を覆い隠すような不透明な存在ではない。彼の行動は、彼自身にとつてと同様にフランソワーズにとつても明快であり、その世界はピエールだけの世界ではな

く、フランソワーズの世界でもある。⁰⁹

ところが、二人が共有する世界の虚偽性が、グザヴィエールという若い女性の出現によつて暴かれる。ピエールがグザヴィエールに恋をすると、フランソワーズは嫉妬を感じ、複数の意識が共存することの不可能性を痛感する。フランソワーズはグザヴィエールの存在について、ピエールに向かって次のように述べる。

なぜって、グザヴィエールが私と同じような意識を持っていることに気づいたからなの。あなたは、他人の意識を内側から感じたことがあるかしら。「…」それは許し
がたいことよ。¹⁰

この小説は、嫉妬心ゆえに、フランソワーズがグザヴィエールの殺害を決意し、実行に移す場面で終わる。その時のフランソワーズの心の動きは次のように表現される。

このレバーを下ろすだけで彼女を殺すことができる。ひとつの意識を殺すのだ。そんなことをしていいのか？と、フランソワーズは考えた。しかし、自分の意識でないような意識の存在を許せるだろうか？ そうなれば、

自分のほうが存在しなくなるのだ。「彼女か、自分か」と、フランソワーズは繰り返して、レバーを下ろした。¹¹

「主人と奴隷の弁証法」で描かれるような、ヘーゲルの私の例証であるボーヴォワールの「招かれた女」を踏まえて、クノーは『人生の日曜日』において、自己意識についての自らの考察を提示したのではないだろうか。

四 自己意識の形成

『人生の日曜日』では、主人公ヴァランタン・ブリュが、妻ジュリアとの関わりを通して、彼女を他者として捉え、同時に、自我の存在を初めて認識するに至る過程が描かれる。

ヴァランタンが額縁商人として働いている間、ジュリアは夫に内緒で家を抜け出し、サフィール婦人の名前で古い師の仕事を始め。占いは大好評を博するが、それは、ヴァランタンがそうとは知らずに、ジュリアに対する情報提供者として働いているからである。ヴァランタンは毎晩、夕食時に、ジュリアに額縁店の客について話をし、ジュリアはそうして得た知識を占いの仕事に活用する。

「それで連中は何と言っていたんだい？」

「ウーセットの甥は二十歳だ。妹がひとりいて、自転車競技が好き。ラペビイの写真を持って来た。」

「誰だいそれ？」

「自転車競技のチャンピオン。ウーセットの甥はその写真の額縁を探しに来たんだ。外見は悪くない。栗色の髪、茶色の目、卵形の顔。目印は、左手の人差し指の第一関節が変形してる。こんなこと興味あるかい？」

「まあね。それでフーセのおかみは？」

「ああ、彼女の娘は最初の聖体拝領をするんだ。すっかり年頃の娘だ。」

「フーセのおかみのほうはもう中年女ね。」ジュリアは笑った。

ジュリアはヴァランタンに、額縁店を訪れる客についての詳細な情報提供と、可能であれば写真も入手することを要求する。こうしてヴァランタンとジュリアは、地域の人々について、毎晩、長時間にわたる会話を交わし、大量の情報を交換するが、そのうちにヴァランタンはジュリアの秘密に勘づくようになる。誰にも会わずに家に閉じこもっているはずのジュリアのほう、ヴァランタンよりも、近所の人々の状況について多くを知っているからである。

「ヴィロールのおかみが、家計に意味不明な穴が開いていると言っていたけど、それはそのせいだったんだね。」

「なぜそれを知ってるの？」

「だんだんと、モノローグが対話に変わってしまう機会が増えて、ヴァランタンは、ジュリアがいつたいどこからそんな噂話を拾ってきたのか不思議に思った。というのも、彼女は決して外出せず、誰にも会わなかったからだ。ジュリアの答えはいつも同じ。」

「覚えてないのかい？ あんたが言ったんじゃないか。」今回は、ヴァランタンはすっかり覚えていた。彼はそんな話はしなかった。それに今回は、彼はよく注意していた。

ヴァランタンは、ジュリアが日中どうしているのか疑問に思うが、本人に問いた다는ことはしない。しかし、この疑惑によつてヴァランタンはジュリアを謎として捉え始める。つまり、ジュリアが、ヴァランタンには知り得ない、自分自身の世界を持っていることに気づくのである。

この二人の関係を通して、クノーは、他者の問題に関する自らの考察を浮かび上がらせる。この問題についてのヴァランタンの考えは原則として明かされず、そもそも明確な考えを持っているかもわからない。しかしヴァランタンが意識的

に考察しなくとも、彼の思考や心理が形をなし、開示される瞬間がある。例えば、動員手帳を二度目に交換する場面です。

部屋はいつものとおり、いや、稀な機会に彼が確かめたように空っぽだった。「……」部屋を横切り、戸棚の中のシーツの山の下を探ろうとして床を歩いていく。すると、何か柔らかなものにつまずいた。

それはジュリアだった。

まるで死人のように、そこに長々と伸びていた。

これでおしまいだ、とヴァランタンは考えた、そしてそのままじっとしていた。やがて考えに沈む、多くの生活は変わるだろう、とほとんど同時に、彼女の生活も変わるだろう。そこから彼はすぐに結論した、ほくはそれほどエゴイストじゃない、彼女のことを考えているんだから。それからもつとすばやく自問した、いったいなぜエゴイストなんて言葉が脳裏に浮かんできたのだろう。

ある日、ヴァランタンの額縁店に、動員手帳の交換のために憲兵がやってくる。ヴァランタンは古い手帳を額縁店の階上にある自宅へ取りに行き、そこで、ジュリアが卒中を起こし死人のように横たわっているのを見つける。この光景は、彼を衝動的かつ無意識的な思考へと駆り立てる。「エゴイスト」

という言葉の使用は、ヴァランタンが自分の自我とジュリアの自我を区別し、彼女を他者と捉えていることを示す。彼自身、この言葉が脳裏に浮かんだことに驚いている。

数日後、体に麻痺が残っていても話ができるようになったジュリアは、ヴァランタンに頼み事をする。それは、テース通りの古い師サフィール婦人の住所へ行き、ドアに貼り紙をすることである。こうしてジュリアは遂にヴァランタンに秘密を打ち明ける。そしてヴァランタンは、ジュリアが彼に内緒で構築した世界を発見し始める。彼は、サフィール婦人のドアに貼り紙を見つけ、そこに記された客たちへの指示文の明晰さに感心する。「ジュリアによくこんな文章が書けたものだ」と驚き、「自分がまだ驚くことができることに驚く」。

クノーは、情報の伝達あるいは統制を通して、ヴァランタンとジュリアの関係を描いている。彼らは、自分たち以上に他人たちに関する大量の情報を交換する。この交換において、ヴァランタンが戦術を磨く一方、ジュリアは透視力を用いて対抗する。こうして駆け引きをするうちに、ヴァランタンはジュリアを謎として捉えるようになる。彼にとってジュリアは、正しい情報と同様、偽りの情報も発する他者であり、手の届かない領域を隠し持っている存在である。

同時にこの主人公は、彼自身も他者にとつての謎でありえること、また、言葉によって情報をコントロールしたり、偽

ったりできることを知る。

ウーセツトが彼の言葉を信じたのを見てとった。ヴァラントンはどぎまぎして、相手の間違いを正してやりたいという気になった。分別に富んだ食料品屋の頭に間違いのちよつとした領域を簡単に作ったことに感心してしまつた。今まで彼は、言葉は真実を表すべきものであり、沈黙は真実を隠すべきものであると考えていた。

クノーは、他者の存在と同様、自分の自我を発見した人間の率直な反応を描いている。

一方、ボーヴォワールの『招かれた女』は、他者の自由を根絶しようとするヘーゲルの自我の葛藤に照準する。サルトルをモデルとするビエールは次のように述べる。

各人が自分の意識を絶対なものとして体験するのは、疑うことができない真実さ。どうやって複数の絶対が共存できるのだろうか？ これは生や死の問題と同じくらい不思議なことだ。世界中のどんな哲学者でも齒が立たない問題さ。

クノーは自己意識について、ボーヴォワールとは対極的な

側面を描いている。ヴァラントンは、ジュリアが秘密を持っていることに気づいても嫉妬を感じないばかりか、彼女が自分の世界を作ったことに感心する。またこの小説において、自我は他者の死を求めることはない。ヴァラントンの額縁店を訪れる客たちは彼に喜んで秘密を打ち明け、また、占い師サフィール婦人の客たちは、自分の考えが他人によつて左右されることを望む。まるで、自我としての輪郭が不明瞭になることを望んでいるかのように。ジュリアの代理でサフィール婦人として働くようになったヴァラントンは、客たちの精神に「幻想が人生の終わりまで宙ぶりのままであるような混濁した領域」を植え付ける。しかしジュリアが指摘するように、騙されることを望んでいるのは客たち自身である。――「人が信じようと決めているときは引き止める手立てはない。ばからしいなんてもんじゃない。気違い沙汰だよ。」クノーは、「混濁した領域」を喜んで受け入れる「人生の日曜日」の自我に、人間精神についての見解を潜ませている。

以上のように本論ではまず、クノーの小説『人生の日曜日』をコジェーヴが伝えた「歴史の終わり」の思想との関わりにおいて読解し、続いて自己意識の問題を考察するため、同時代の小説であるボーヴォワールの『招かれた女』との比較を試みた。クノーの作品はフランスの日常生活をコミカルに描

き出す一方、そこには哲学的な洞察を読み込むことが出来る。とはいえず、いわゆる哲学的著作を残さず、思想に向き合う手段として小説を選んだクノーの創作行為は、メッセージを伝えると同時に、自分自身の言葉への不信を書き入れるところ、矛盾を含んだ実践となっている。

註

- (1) Raymond QUENEAU, 《Premières confrontations avec Hegel》, *Critique*, août-septembre 1963, pp. 694-700.
- (2) QUENEAU, *Le Dimanche de la vie* [1952], Gallimard, 1998, p. 11.
- (3) *Ibid.*, p. 78.
- (4) *Ibid.*, p. 187.
- (5) *Ibid.*, p. 70.
- (6) Alexandre KOJÈVE, *Introduction à la lecture de Hegel : Leçons sur la Phénoménologie de l'Esprit professées de 1933 à 1939 à l'École des Hautes Études réunies et publiées par Raymond Queneau* [1947], Gallimard, 1994, p. 301.
- (7) QUENEAU, *Le Dimanche de la vie*, p. 189.
- (8) *Ibid.*, p. 178.
- (9) *Ibid.*, p. 17.

- (10) *Ibid.*, p. 78.
- (11) *Ibid.*, p. 163.
- (12) Pierre MACHERY, 《Divagations hégéliennes de Raymond Queneau》, *À quoi pense la littérature ?*, PUF, 1990, p. 60.
- (13) KOJÈVE, 《Les Romans de la sagesse》, *Critique*, mai 1952, p. 388.
- (14) QUENEAU, *Journaux 1914-1965*, Gallimard, 1996, p. 768.
- (15) Simone de BEAUVOIR, *L'Invitée* [1943], Gallimard, 2000, p. 8.
- (16) Maurice MERLEAU-PONTY, 《Le Roman et la métaphysique》, *Sens et non-sens*, Nagel, 1948, pp. 52-53.
- (17) BEAUVOIR, *L'Invitée*, p. 369.
- (18) *Ibid.*, p. 503.
- (19) QUENEAU, *Le Dimanche de la vie*, p. 134.
- (20) *Ibid.*, p. 163.
- (21) *Ibid.*, pp. 196-197.
- (22) *Ibid.*, p. 203.
- (23) *Ibid.*, p. 205.
- (24) BEAUVOIR, *L'Invitée*, p. 375.
- (25) QUENEAU, *Le Dimanche de la vie*, p. 206.
- (26) *Ibid.*, p. 202.